

美し国の創り方

個性ある多様な地域の風景づくり



一乗谷川を挟んだ細長い戦国城下町は下城戸から上城戸で独立した戦国世界を構成。

福井市城戸ノ内町一乗谷の戦国大名朝倉氏遺跡

「白の風景」や「時の旅」の福井県から

私の勤める福井県立大学は、福井市内から車で30分ぐらい。九頭竜川の福松橋を渡ったところがあり、永平寺キャンパスと呼ぶ。一昨年私が学長を引き受けて最初の仕事で、キャンパス名を変更したものです。永平寺町所在なので住居表示通りにすべきとの言い分のほかに、いまま午前4時から座禅や修行に徹している大本山永平寺の仏教道場の名を冠することで、高

等教育機関の果すべき人格陶冶のミッションを共有したいものだと思います。

福井市内からキャンパスに向かう車窓は、春は麦秋、夏はキラキラ輝く青田、秋は黄金の稲穂の波が一面にひろがって見えます。水田の向こうには伝統工法の重厚な家並みの集落や屋敷林の文化的景観、中景には北陸自動車道の福井北インターと疾走する車列のシー

ン。その奥の奥には永平寺の七堂伽藍のスピリチュアルな世界が隠れているのです。遠景には幾重にも重なる山稜風景が広がっています。その標高は決して高くないのですが、雪で化粧され、時々には霧や靄がかかるので、何とも神秘的な「白い風景」になるのです。福松橋の眼下、九頭竜の滔々とした川の流れにも靄がかかるので、まだ見ぬ天空の城・越前大野城のイメージとも重なります。大野の手前、勝山の恐竜博物館は全国から百万を超えるビジターで知られていま



福井県立大学長／ランドスケープ・アーキテクト

しんじ いそや
進士 五十八

東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士(環境学・造園学)
日本学術会議環境学委員長、日本造園学会長、日本都市計画学会長、日本生活学会長、政府の国土審議会特別委員、社会資本整備審議会臨時委員、自然再生専門家会議委員長、東京都、長野県、三鷹市、新宿区、豊島区、江戸川区の景観審議会会長、横浜市環境創造審議会会長、NPO美し国づくり協会理事長など歴任。著作：『アメニティ・デザイン』『風景デザイン』『ルーラルランドスケープ・デザインの手法』(学芸出版社)、『進士五十八と22人のランドスケープ・アーキテクト』(マルモ出版)ほか多数。受賞：内閣みどりの学術賞、紫綬褒章受章



恐竜博物館(福井県勝山市 建築家 黒川紀章の設計)

1億数千万年の遥かな時間をシンプルな恐竜の卵で表現。仰角10度の長尾山の針葉樹の濃い緑の台地上に立地。長いアクセス道路で徐々に博物館に近づくシーケンスにとってシンプルなランドマークの恐竜の卵を見つめる楽しみがある。



すが、森の上の恐竜の卵を思わせる黒川紀章設計の銀色のミュージアムが霧に浮かぶ風景もなかなかのものです。

恐竜の1億数千万年、三方五湖の水月湖の年縞7万年、縄文遺跡鳥浜貝塚の1万2000年、御食国・鯖街道・お水おくりの小浜、宗教都市の白山平泉寺1300年、平安期以来の若狭路の仏塔仏寺、そして永平寺禅の里の780年、一乗谷朝倉庭園遺跡550年等々。実に福井県は、地球史から日本史へ悠久の

時間を全身で実感できる「旅する大地」そのものです。

それなのに福井県の観光担当者はインバウンドの低調な入り込みに悩んでいます。

そして一方で、この美しい「白の風景」は熱帯、亜熱帯からのインバウンドのみなさんには最高の感激と感動を与えるだろうし、エキサイティングなアクティブシーンを提供できる筈。アイスバーンの道路に翻弄されて田んぼに落ちた車を何台か見て、「雪道ラリー」を企画すれば

ジェットコースター以上の緊張感を体験させられるのでは?などと、つい危険なイベントプログラムを思いつきます。かつて「地吹雪ツアー」もあったし。異日常・非日常体験の提供こそ観光の基本、と考えれば、冬の観光というと全国各地の市民スキー、かまくらづくり等々。どうも無難すぎるなァと思いつつ、やはりこの辺のことは観光のプロにお任せして、私はランドスケープ・アーキテクトらしく「風景づくり」について考えたいと思います。

個性と多様性のある風景づくりが何故大切な

「小さい子供がバスや電車に乗るとすぐに窓の外を見がります。その好奇心や探究心は「観光」の原点に通じるものがあります。人間が本来持つ好奇心や探究心に答え、人間の「喜び」や「生きがい」に資することが「観光」の本質だと考えます。人間の生活には経済基盤がないと困りま

すが、経済はあくまで手段であって、真に求めているのは「喜び」や「生きがい」なのです。」(観光文化(215)、2012)

私の尊敬する観光学者、鈴木忠義先生のお言葉です。

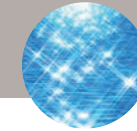
観光立国宣言2003の「住んでよし訪れてよしの国づくり」は、市民誰もが

県民の誇りでもあるが、一方で県外向けの観光資源データ集としても編集した。100地点を選んでいるが各景5点の写真と地図で構成している。



百景選定懇談会座長・監修：進士五十八

「福井ふるさと百景」(福井県、2012年)



十勝千年の森からの風景 高野ランドスケープの計画作品

北の国の観光要素は遠景の山岳、中景の防風林、牧草地、近景の樹木まで近・中・遠景とパノラマのすべてである。

北の国の雄大さは大地彫刻、観光客はセグウェイでアースワークを走りまわることができる。



大地造形 イギリスのガーデンデザイナー・ダンピアソンのアースワーク作品



北海道十勝千年の森第1回国際ガーデンショーへの招待作家・造園家 中谷耿一郎設計作品

わずかのレベル差を生かした石垣ベンチと石畳の曲線路が効果的。柔らかな芝草と自然の地場石材、緑と白、硬軟のコントラスト。北の大地の微地形と植生を生かすことでこれもひとつの作品だという発想が大切。

共感する風景づくりの目標です。鈴木先生のおっしゃる「喜び・生きがい」は、住民か訪問者か？ではなく、あらゆる人々の生きる目標だからです。

近年の観光研究は、ビジターの属性の多面性に応じたニーズの把握、それへの応答や観光サービスの質の向上への要件にいたる多方面のデータを示し詳細に分析しています。私は「観光客を受け入れる住民にはプライドを持たせ、ビジターには訪ねたくなる個性ある風景、喜びを感じる風景づくり」の意義と基本を説明したいと思います。

なぜ個性ある風景か？その最大の理由は、あらゆる面での工業文明の進行です。工業化とは、規格化さ

れた工業製品を大量生産、大量消費することです。鉄とアルミとガラス製の高層建築物に都市はおおわれています。たとえ社寺の境内地でさえも工場で整形された御影石の平板やセメント製の定型インターロッキングの舗装でおおわれてしまっています。世界中がそういう無機的な風景で染められていくのが文明というものです。こうして景観は画一化し、当然ながら没個性的風景にならざるを得ないのです。

文明的景観と 文化的景観の調和

文明 (civilization) とは野蛮を

脱出することとされています。農業文明から工業文明、機械文明から情報文明、環境文明へと進んでいます。世界の文明はイタリア、フランス、イギリス、アメリカの順に進み、やがて中国になるでしょう。高速文明は世界中の飛行場や新幹線を同じにしています。これに対して文化 (culture) は、耕す (cultivate) からきています。たとえば粘土が砂か土質がちがうと耕し方も作物もちがうのです。東南アジアの水田風景と、欧州の牧場風景は典型ですが、農業のやり方も農家のくらし方も、国や地方でちがうのです。気候・植生・水質など自然風土、民族によって働き方、生き方、建物から

都市の形、信仰のあり方、そしてその歴史や文化へと、それぞれの国や地方に固有性があり、その全体が「地域らしい風景」として現出しているのです。

ところで、人間というものは果して「文明」だけで生きていけるのでしょうか。かつてEUのデラール委員長が「農業は経済よりも大事です。農業 (agriculture) は文化 (culture) ですから。」といました。「文化」(culture) は民族が生きるために不可欠のアイデンティティーそのものだからと言い切ったのです。

私たちがみる風景には、文明的景観と文化的景観が複合しています。単純化すれば、道路、鉄道、近

代建築など人工物は「文明的景観」が殆どですし、大地に根ざした山林、里山、田畑、防風林、農家や集落の鎮守や寺などの殆どは「文化的景観」です。いま流行の言葉でいえば、人工物・無機物による「グレー・インフラ」と自然物・有機物による「グリーン・インフラ」です。国

土的スケールで見れば、圧倒的な山林農地など「地」(ground) を安定した「背景」だと考えて、その良さを壊さぬように、またこれに調和するように地域らしさを演出できる「図」(figure) を効果的かつ風景的な「点景」として配置すれば「ほんとうの風景づくり」になるのです。

「美し国」の風景づくりの創り方

ふつう観光のプロは、「収入」に注目するあまり、観光スポットである「対象」と、遊び、見物、見学のための「時間」をとりあげ、誘客の効率

性から「観光地づくり」を目指します。しかし私は、ほんとうはスポットだけをつくる「観光地づくり」ではなくて、人々の多様な営みの結果も



「進士研究室：広島県下浦刈ガーデンアイランド構想」(2002年)／「庭園の島」マルモ出版(2003年)のうちの造園家 伊藤邦衛の作品。

コンクリート防潮堤を地場材料の自然石、花崗岩の立石組で修景して、朝鮮通信使資料館の周辺景観を整備した。

家屋の配置、工法、屋根勾配、瓦屋根、材料、色彩の統一がとれ、背後の山林にかこまれた落ち着きのある郷土景観。



地方技術(ちかたぎじゅつ)伝統工法による福井県越前町江波の白壁民家群



越前海岸の切り花用のエチゼンスイセンの栽培地の文化的景観・冬の水仙風景

越前町梨子ヶ平から日本海を眺望。生産のための農業景観が見事に地域らしさを醸成するという好例。





たらされる「風景づくり・風景育て」でなければいけないと考えます。「白の風景」の冬ばかりか四季のすべてに、里にも山にも、また自然にも歴史文化、そして世界に展開する現代技術にも、そこに人が生きている限り、さらには経済と生業の営みがある限り、そこには地域固有の「風景」ができてくるのです。その「風景」を味わいたくて旅してくれる人々が「観光」の主人公なのです。要するに「風景の目」を持った人々が見つめてくれれば、世界中のすべての風景は「観光対象」になるわけです。

人間の誘目性を高める 景観特性

しかしながら、もちろん「風景の目」に映り易く、人間の誘目性を高める景観特性というものはあります。まずビジュアルには「図」になり易いもの。より目立つ形、色、大きさ。より巨大な、より高い、より広い、より深い、より美しいもの等です。次のステップとして私が強調したいのは「八景式風景観」です。中国からの瀟湘八景・西湖十景のベスト8やベスト10には、地形、場所、そこでの四季や朝夕の時間、晴雨や雪など気候、帰帆が意味する漁師の暮らし、晩鐘のサウンドスケープ等、多彩な時空と耳目と五感を総動員する「風景享受の条件」が詠み込まれています。五感によってトータルランドスケープを味わえるように「風景」を編集する



方法を「八景式」に学ぶことができます。こうして希求すべきは、地域らしさのある「美の世界」です。

ところで「美」の文字は太った羊と書きます。人類生存に不可欠な必然性を備えたものということです。世界の名園はたとえ砂漠地帯でもアランプラ宮のように必ず水があります。エデンのように水と花々が咲きみだれ生命感あふれる風景が人間にとって最も好ましいのです。もちろん「図」が輝くには、その背景が緑や農など安定した「地」の風景が存在することが大切です。

もうひとつ知っておいてほしいことがあります。よく景観行政や景観デザイナーは、「景観ガイドライン」を設けて、あれはいいがこれは悪いといっています。マンセル値で特定の色彩域を強要します。場所によっては、そのことが落ちついた町並みを保全することはあります。しかし、基本的に色は素材に帰属するものです。ペイントの赤で塗装されたものは目立ちすぎますが、ラテライトや赤土、土を焼いたレンガは地色なのでどんなに赤くても何の問題もありません。また、たとえペイント塗装の真っ赤でも圧倒的な緑濃き深山幽谷の架橋であれば、むしろ効果的な点景としても、アクセントカラーとしても有効です。

風景の解剖―「地質・地形・植生・水理・地理」

「風景」を解剖してみましょう。大地の下から「**地質・地形・植生・水理・地理**」が順に重なっています。たとえば**地質**が花崗岩系の砂やマサ土ですと風景は白っぽくなります。朝鮮通信使が瀬戸内海を船ですすみ見て、「白砂青松」を日本風景の特色としたのは中国地方が花崗岩地質であったためです。

山川海など**地形**がつくり出した風景は「愛宕山」、「汐見坂」、「品海」がテーマの広重や北斎の名所絵になっています。日本中の〇〇富士は独立峰です。

植生と景観が象徴的なのは「武蔵野」、国木田独歩に発見された雑木林の風景です。九州のクスノキ、関東のケヤキ、東北のブナ、北海道のエゾマツはみんな自然植生の景観です。春の花見の桜、秋の紅葉狩りは人文景観。花札の世界です。海辺にはクロマツ、尾根にはアカマツ、谷にはスギ。季節と場所と植物の組合せのバリエーションが「〇〇らしさ」を演出してくれます。

次は**水理**。水、川、沼、沢、池、湖など水系と水景。野川、谷川など場所性での違い。橋と茶店、柳桜の並木や土手など人文的要素を加えると絵になり詩に詠まれる名所になります。古今東西を問わず風景画はほとんど水の風景です。

さいごに**地理**。人文地理、歴史地理、経済地理というように集落、都

市、商工業など多くは人文的景観（man made landscape）で、それぞれの国の発展段階、政治経済システム、産業構造などでちがってきます。私は「風景づくり」としても、「現代的ツーリズム」としても、「エコ・ツーリズム」「グリーン・ツーリズム」「ブルー・ツーリズム」のみならず、産業（Industry）・技術（Technology）・学術（Science）、そして芸術風景（Art-scape）はこれから生きるアクティブな人々の強い関心をひくだろうと思っています。

地域主体の風景めざす 「景観法」

ここで皆さんに誤解してほしくないのは、「風景づくり」とか「景観政策」というと「自然や歴史文化の保存」ばかりを強調しすぎるのではなく、新しく創造することを否定しているのではないと思われることです。

日本政府は平成15年7月「美しい

国づくり政策大綱」（国土交通省）を策定し、翌2004年「景観法」を公布しました。直接的には「観光立国」を支える法整備ですが、それまでの全国各地の数百以上の自治体が制定してきた自主条例の親法として、また地域主体の地域づくりを促進する大きな目標もあったのです。景観法のすばらしさは、国が好ましいと思う目指すべき景観像を明示しないで、都道府県、さらにはその指定を受けた景観行政団体が議会や住民と共に「地域らしい風景づくり」を推進してほしい、としたことです。ふつうの法律は、国が規範を指示し、規制誘導しようとするのですが、景観法はそうはせず地域に任せているのです。

「地場材」「自然材」と「地方技術」の 活用で「地域らしさ」を創ろう

景観法以後、みなさんが景観の大切さを意識するようになったのは素晴らしいことです。しかし日本中

が看板を無くせとか、色彩基準で統一しようとか、電柱の地下埋設が第一だとか口を揃えておられるのは困ったものです。ゲニウス・ロキ（地霊）といって、土地には土地固有の場所の記憶、場所性があるのです。たとえば景観に配慮する色彩設計をする場合、同じ色でも場所により妥否が異なるのです。景観にとって、この色、この形、この大きさ、このデザインが絶対正しいという一般解はないのです。地方、地域、場所によってみんな違う個別解しかないのです。具体的な手法、技法については、拙著『風景デザイン』や『ルーラルランドスケープ・デザインの手法』（学芸出版社）をご覧ください。第1に郷土色を醸す「地場材」を多用すること、第2に時間美を刻む「自然材」の尊重。第3に「地方（ちかた）技術（ぎじゅつ）」の活用。第4に目立つモノは緑や山を必ず背景に置くこと、山の斜度とパラレルな傾斜屋根にすることです。



発生材による擁壁（愛知県の常滑焼）

愛知県常滑市では工業的な常滑焼の近代土管などを全国に出荷。その廃材を利用した壁面は地域独自の景観をもたらしてくれる。

多摩川ゴロタの石積擁壁。多摩川流域らしさを醸す。



世田谷区の地場材である多摩川石を農民の手で積み上げた風景